

# お茶の水時代

— 思ひ出をたどる —

○ 下 田 た づ

抑々私が母校に足を入れましたのは、明治もまだ若い十四年で、その春のはじめ二月で、今の附屬高等女學校の前身であつた、豫科の五級に入學致しました。

其の頃は、本科も豫科も六學級で、一年が二學年になつてをりましたから、二月と七月とに卒業式があり、何れも三年で卒業といふわけになつてをりました。それで豫科生は三級を終了すれば、本科の試験を受ける資格を得ることになつてをりましたので、私は三級終て後直に試験を受けまして、即ち十五年の九月から本科生になつたので御座います。なんですか餘事に渡つてをる様で御座いますが、私の心中ではこの頃からは幼稚園と、結び付いてをるので御座いましたから暫く、

當時は、聖橋は勿論御茶の水橋さへありませんで、普通交通機關といふものは、人力車ばかりでありましたから、母校の前あたりは實に靜なもので、本所の宅を出まして兩國橋を渡り、柳原河岸を通り萬世橋を経て、ほつとひみ意氣あの聖堂の坂にさしかかります。本の包みを抱へた生徒が靜々あるいて居るばかりで、聖堂の森は綠に御茶の水の流れは清く、こゝで全く心氣一轉、實に神々しい繪の様な風情が見られました。その頃は本統にあるきながらしやべる者なきはあ

りませぬでしたし、校門をはいるこ愈々慎みまして、一步一步踏み占めて行くこいふ風で、今の靴の先きです。べる様にして、友達と談笑しながら行くこいふ傍若無人な有様なきは、思ひもよりませぬでした。

聖堂の坂の上には、東京師範學校(今の東京高等師範學校)の門が、丁度今の母校の正門の所に儼然と構へて居て、暫く行くこ稍々柔らかい感じを持つた母校の門が、今の御茶の水橋の門の邊にありました。此の門をはいるこ道は三徑に分れてゐるて廣々した空地がある。植込みには梧桐の太木が配置されてありました。

校舎は木造のペンキ塗りで、中央が大玄關左右に同様の小玄關があつて、左方は通學生の出入口、右方は事務室の出入口でもあり、又寄宿生の出入口でもありました。それで大體下は講堂及び教室、二階は寄宿舎で、教員室事務室等は右方に増築された、至極粗末なものであり、又食堂浴室洗面所等は、左方裏手の別建物で御座いました。

それで今の方に申しましたら驚かれ又笑はれるでせうと思ひます事は、小學校を私と同時に卒業した音羽ふじ子が、直に此の學校の豫科に入學しましたのを羨んで自分も入れてほしい、勉強なきは勿論餘暇でよい、うちの用も何でもするから、戸主であつた兄に頼み母の助言を得て漸く願書提出の許しを得、勇んで本所から遙々入學願書を持參致しましたのは、二月の幾日かで恐る恐る校門に入り、受付へそれを出すこやがて事務員が出てこられて、今試験をしてゐるから直に其の場にはいつて試験をお受けなさいと申されました。もこより準備もない事でしたから半驚きましたが、一面には喜ばしくもあり、すぐ正面の講堂へ案内を受けました。はいつて見るこ満員で偉らさうな人ばかり、既に黒板に算術の問題が數題出てをりました。まづ一題づつ片付けて時間にも外れず人並に出し、それから別室に一人一人呼ばれて、國史略の素讀をさせられ、少しまごついたがそれで試験がすんだわけで、豫科生として入學を許されたので御座いました。

この豫科と申すのは強ち本科に入る準備こいふ、爲ばかりではありませぬ様でしたから、小學校を出て尙學ばうこする者は皆これに入學したわけで、自然一つ級の中でもこのまゝ終らうこするものこ、更に本科に進まうこする者この二派に

なつて居りましたが、本科にはいる方は少う御座いました。女學校といふものは府立女子師範學校の外は、こゝばかりでしたから斯様になつたものでせうが、今の高等女學校の生徒の様ではなく、特志の人が遠方から通つたもので御座いました。

よく幼稚園の幼児が成人の後、幼稚園の藤棚お池お山なき、深く印象して居て、話題に出されますが、私もあこがれてくゞつた校門ですから、五十一年後の今日迄もその試験場の有様や試験官の御様子は、まざまざ心に残つてをります。

その時やはり若い先生方の御風采が最も眼にうつりました。穂積銀子先生その當時上野先生が、試験場に御出でになりましたが、御召しは繻紬の鶯色でお羽織は黒の毛襦子に縫紋をされたものでした。今考へますと十九か二十歳で御出ででしたらうにお地味なものでしたが私は、唯々威厳のある御立派な御方ご存じ上げました。その後算術地理なきの御教授を受け愈々敬意を表してをりました。此の頃本科御出身で尙外に、藤田光子先生當時丸橋先生、吉田伸子先生當時師岡先生なごも豫科生の御教授をなさいました。藤田先生は主として植物、吉田先生は主として化學に御出ででした。

其の頃は大體木綿から銘仙位の着物には、黒の襦子又は毛襦子の半襟をかけたもので御座いましたが、此の學校に來て見ましたら誰も半襟をかけたものを着て居られないので、もごより木綿の着物ながら半襟をこつてもらつたり何かご大騒ぎをいたしました。又生徒同志の辭さいふものが一種外ご變つて居たごが耳立ちまして忽ち眞似ました。それからその辭は學校辭ご申してよくないごいはれたものでしたが、今は東京の辭の様に人が申します。よくつてよ、知らないわなきご申す様なご。さて段々餘談が長くなりましたが、かうして豫科生ごして通學してをる間に、花にもました美しい感じを與へてくれましたのは、幼稚園の幼児達で御座いました。幼稚園の場所は丁度今の所で西側に門があり、建物は今思へば屋上庭園でもありさうな屋根の形で、南の方は軒に續いて藤棚があり、その下は芝生の様でした。それから何の障る物なく、南方御茶の水の通りの所まで花壇が御座いました。これは幼稚園のものではなく、植物研究の資料ご存じましたが、

幼稚園との間に何の區劃もありません。生徒も芝生の邊へ行き、幼児もこの花壇の間を蝶の様に縫てあるいてるたものでして、服装は男も女も長い袖の美しい着物で、男の子の内には袴をはいて黒の紋付の羽織を着たお子もみえました。小西先生はお羽織袴という御姿で、旗を持つてお走りになり、そのあみを幼児が鳩の様に群れて追ふのを時々見受けました。豊田先生や近藤先生は丸髻に御上げになり、横川先生は銀杏返しにお結びになつて、幼児の手をお引きになりこやかに遊ばして、おはなしながらこの花壇の間を、おあるきになるのは多分毎日の事で御座いましたらう。

豫科生は晝食後の休み時間に園へ行きませうと、三三五五連れ立つて此の方面をあるいたものでした。花壇のある所を園と稱へてをりましたが、眞の樂園とは斯様な所を申すのであらうと思ひました。今考へても夢の様に浮んで参ります。

こゝで幼稚園に最も必要な音楽の事唱歌に就て申さねばなりません。此の頃の唱歌は主として古風な歌に、宮商角徵羽の譜を付けたもので、宮内省の伶人が御出でになつて教へられました。時間外でした。又本科の上級になりますと伴奏になる和琴等なごも習ひました。此の當時文部省の音楽取調所(今の音楽學校の前身か)にいふそれへ、アメリカ人のメーソン氏が多分囑託さかかひのでありましたでせうお出でになつて居て、學校へも唱歌を教へにお出でになりました。小學唱歌集といふ様なものを習ひ、音階なごもはじめ練習いたしました。たしか時間割を變更したりして各級合同で時には本科も豫科も一緒になつて練習した事も御座いました。私共は西洋唱歌を申してをりました。今の唱歌の初めて御座います。これで幼稚園の唱歌に就いても變動が起つたご存じます。メーソン先生はバイオリンをお用になりましたが、幼児達にも歌はせてお出でになる處を御見受けいたしましたごも御座いました。十四年の頃かご存じますが、音楽取調所の催しでしたらう、私達生徒全體が聖堂の中の大殿へ連れられて、春の彌生だの螢の光なごをうたはせられましたが、所謂西洋唱歌を一般に知らせる爲だご承りました。聴衆は官吏ごか教育家であつたらうご今想像致しますが、滿堂唯人ご晴れやかなもので御座いました。その後餘り長くなってメーソン先生は歸國されました。私が本科にはいつた頃には早や御出で

はありません(無論西洋唱歌を盛にうたひましたが、奥好義先生が御教へになり時間割なきもきまつてをりました)。時の音楽取調所長は伊澤修二氏でメーソン先生は所長に意見の合はない所から歸られるなき私共生徒の耳にいらぬこゝまではいりました。メーソン先生は可なりな御老人で、熱心に親切に教へて下さいましたから、生徒達は御歸國の時に大層別れを惜しみました。學校では全體の生徒を集めこの先生を中心にして、表々關で寫眞をお撮りになりました。幼稚園の幼児もはいつたき存じます。小西先生なきは深い御印象がおりでせうき存じます。

メーソン先生は日本語はおわかりにならず、私達は無論英語のわかる筈も御座いませぬから、いつも通譯の方が御付きになりました、岡倉先生いふ方がよく御出でになりましたが、きつて今英語で有名な岡倉先生のお若い時であつたらうき存じます。又後に高嶺先生の奥様におなりになつた中村せん子氏なきはバイオリンをお弾きにもなり、助手の様にして通譯もして下さいました。私共はもう一度きおつしやるこゝだけわかつてをりました。再唱させられる時必要な御辭で御座いましたから。

音楽の序に考へ出しましたが私達は、唱歌の歌を琴で弾く事を習ひました。普遍的な樂器を用ゐて何處でも教へる事が出来る爲にいふこゝで、時に附屬小學校で試した事もありましたき存じます。先生は立派な方その當時でも第一流でお出でになつた山勢杉韻先生で御婦人の助手を御連れになり、丁寧に教へて下さいました。寢屋の板戸が美しきか思ひ浮べられます。その後大阪の幼稚園でも琴をお用ゐるになつた事があつたき承りました。

私は十八年の三月から教生として幼稚園に参りましたが、この前何年の事でしたか嵐の爲に幼稚園の屋根が吹き飛ばされましたので、その頃は本校の東方の一部を仕切つて幼稚園として居られました。薄暗いやな室で、遊び場所も前の所ではなく小學校の藤棚の下なきへ出て遊んでをりました。組は年齢でわけられて五組あつたかき存じます。私は四の組へ

出ました。御擔任は加古烈子先生でした。たしか存じますが御病氣で一回も御指導を頂く事も出来ないで困りました。組は三十人ばかりで長壽吉さんとか井上達一さんなどが居られました。幼児の机には碁盤目が刻まれてありました。

それから十八年の七月に卒業をして、二十年の九月に幼稚園に奉職するこゝになりました。佐方しず子先生と友人の音羽ふじ子の推薦で本官ではないと申されましたが、そんな事を考へる餘地は私には御座いませぬでした。唯母校の幼稚園に承り入學以來の喜びで、先輩に就て十分に研究も出来る大きな望みを抱いて出ました。

この頃幼稚園はきこに在つたかき申します、震災にかゝつた建物で校内第一といはれたものでした。僅二年程の間に能くも變つて立派になつたものと驚きました。翌二十一年の五月に訓導を拜命して組擔任になりました。この頃は保姆の稱はなく訓導で保育係を命ずるふ辭令を別に頂くので御座いました。組は年齢で四組に分れてをり、一組四十人位で擔任の外に助手があり、机は二人用で碁盤目は刻まれたのではなくて書いたもので寸法はインチになつてをりました。鳩山文相なごも此の時分御在園でした。幼児の服装は今より餘り、違はなかつた様に存じます、筒袖や洋服でしたが、鳩山さんの外二三の方はズボンでなくて襪のあるスカート風のものをおはきになつてをられました。

そして保姆達は競つてピアノの勉強をいたしました、本校の奥先生について朝二時間も前に出て練習もし稽古も致して本校の祝賀會なごに出てモザートのソナタの連弾位もいたしました程でした。音羽さんはバイオリンをもなさいました。こゝに思出の深いのは、皇后陛下行啓の御時の事で御座います、よく唱歌や遊嬉をさせましたが、遊嬉でも辭を一つも申すこゝなく唯ピアノの指揮で動作をいろいろにかへます、練習したきはいへ幼児にして感心なものだと思はれた位で、今でも其の光景が眼の前に浮びます四十年餘の昔の事で御座います。が此の人々の記憶にもきつて明に残つてをる事で御座いませう。取り止めもなく長くなりました、これで筆を止めませうと存じましたが、更に改めまして書きおきたい事が御座います。